

# 三 本 木 窯 跡

発 掘 調 査 報 告 書

1 9 8 2

山 形 県 教 育 委 員 会

さん ほん ぎ  
三 本 木 窯 跡

発掘調査報告書

昭和57年3月  
山形県  
山形県教育委員会

# 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和 56 年度に実施した、県立西藏王公園整備事業・園路工事にかかる「三本木窯跡」の、発掘調査結果をまとめたものであります。

県民の憩いの場でもある、西藏王高原の緩やかな丘陵地帯には、その豊かな自然環境を背景に、いくつかの遺跡が発見されており、本窯跡もその一つであります。

調査の結果、平安時代後半期の登り窯をはじめ、そこで生産された土器類等が発掘され、当時の焼き物の生産跡を伺い知ることができました。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは、増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの問題が山積しております。この両者の調整を行ない、埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題であり、県教育委員会においては、一層の努力を重ねてきているところであります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

終わりに、調査にあたって適切な御指導と多大なる御協力をいただいた関係各位に、心から感謝申し上げるものであります。

昭和 57 年 3 月

山形県教育委員会  
教育長 大竹正治

# 例　　言

- 1 本報告書は、県立西蔵王公園整備事業・園路工事にかかる三本木窯跡緊急発掘調査報告書である。調査は、山形県教育委員会が山形県土木部の委託を受けて実施した。期間は、昭和 56 年 6 月 3 日～同年 6 月 26 日までの、延 18 日間である。
- 2 調査にあたっては、山形県土木部計画課・山形建設事務所・山形市教育委員会等の諸関係機関の協力を得た。ここに記して感謝を申し上げる。
- 3 調査体制は、下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会  
調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団  
調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）  
　　　　　　現場主任 名和達朗（山形県教育庁文化課技師）  
　　　　　　調査員 渋谷孝雄（山形県教育庁文化課技師）  
　　　　　　中島 寛（山形県教育庁文化課主事）  
調査協力 山形市教育委員会  
事務局 事務局長 浜田清明（山形県教育庁文化課長）  
　　　　　　事務局長補佐 萩野和夫（山形県教育庁文化課長補佐）  
　　　　　　事務局員 設楽周一郎（山形県教育庁文化課主事）  
　　　　　　田内糸子（山形県教育庁文化課主事）

- 4 掃図縮尺は、遺構については 60 分の 1、遺物については 2 分の 1、3 分の 1 を基本とし、それぞれにスケールを示した。また遺物図版は、2 分の 1 とした。掃図中及び文中の記号は、G—グリッド・SQ—窯跡・SK—土壤・SP—ピット・SX—性格不明落ち込み・F—覆土をそれぞれ示している。なお、方位は磁北に合わせた。
- 5 本報告書の作成は、名和達朗が執筆し、遺物実測については名和達朗・渋谷孝雄が担当し、掃図及び図版作成については、田中せつ子・清野匡子がこれを補助した。  
本書の編集は渋谷孝雄・名和達朗が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

# 目 次

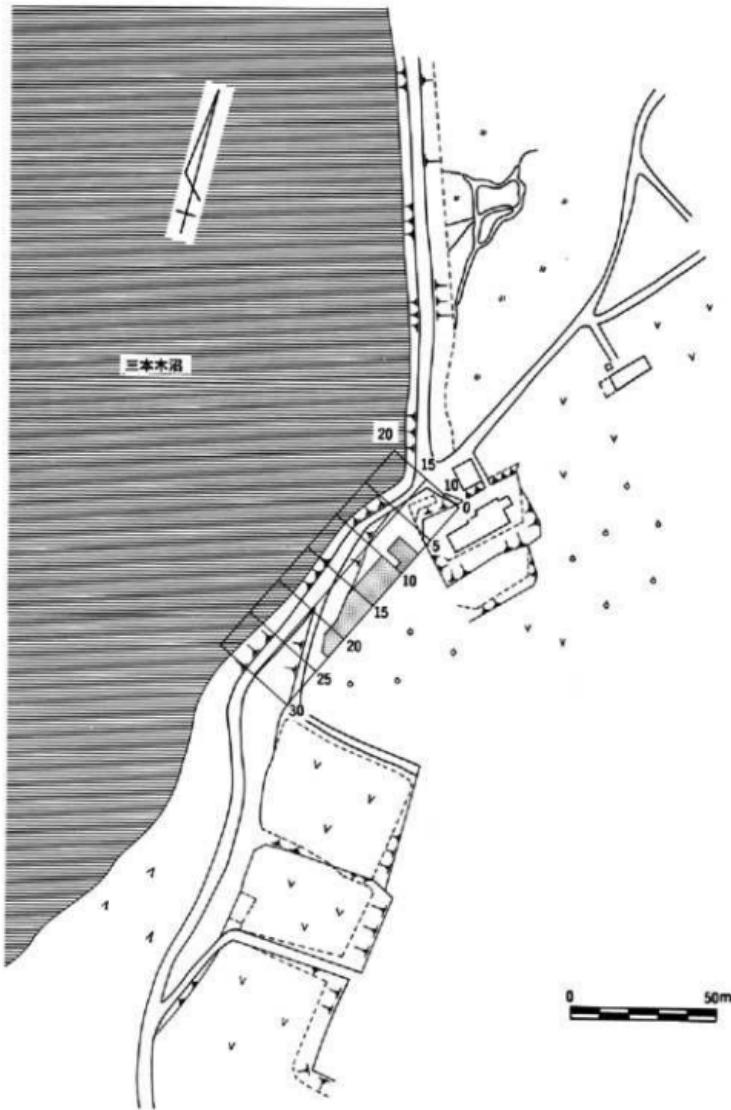
I 調査の経緯	1
II 遺跡の概要	2
III 遺構	3
IV 遺物	5
V まとめ	10

# 挿図目次

第1図 遺跡全体図	墳、S P 4号ピット、S X 2・
第2図 遺跡位置図	5・7号落ち込み
第3図 土層断面図	6
第4図 遺構配置図	7
第5図 S Q 1号窯跡、S K 3・6号土	8

# 図版目次

図版 1 遺跡遠景（北側から）	遺跡	図版 5 S X 2号落ち込み	S X 5号
近景（南側から）		落ち込み	
図版 2 調査風景	土層断面	図版 6 S K 6号土壤	S X 7号落ち
図版 3 S Q 1号窯跡・S K 3号土壤・		込み	
S P 4号ピット全景	S K 3	図版 7 出土土器(1)	出土土器(2)
号土壤・S P 4号ピット		図版 8 出土土器(3)	出土土器(4)
図版 4 S Q 1号窯跡	同・土層断面	図版 9 出土土器(5)	出土土器(6)



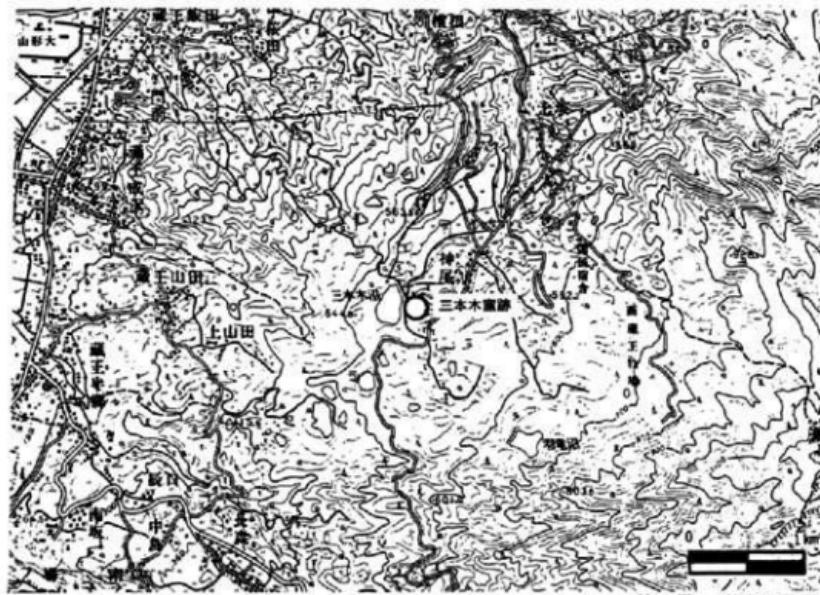
第1図 遺跡全体図

## I 調査の経緯

三本木窯跡は、山形県山形市大字神尾字小山に所在する。以前から遺物が出土することで知られており、昭和31年と40年に発掘調査が行なわれている。その結果、住居跡・登り窯跡・土壙等が検出され、出土土器の特徴から平安時代に位置づけられている(秋葉1967)。そのため、山形県遺跡地図には番号57で登録されている。

この地域に昭和56年度・県立西蔵王公園整備事業・園路工事が計画されることになり、遺跡の一部が破壊される恐れがあるため、山形県教育委員会では昭和55年11月に詳細分布調査を実施したところ、予定路線内に窯跡が確認された。これを踏まえて県教委・県土木部・山形建設事務所・山形市教委等、関係機関の間で協議・調整が行なわれ、その結果記録保存のための緊急発掘調査を実施するはこびとなったものである。

調査は、まず全体に $3 \times 3$ (m)を単位とするグリッドを設定し、南北方向をX軸・東西方向Y軸と決定した。つぎに昨年度の分布調査結果を基に、調査区の南側から調査を開始し、順次北側に掘り進めた。その結果、遺構・遺物は主として調査区南側寄りに検出され、それぞれ精査の後実測・写真撮影等を行ない調査を終了した。



第2図 遺跡位置図

## II 遺跡の概要

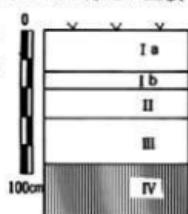
遺跡は山形市街の南東約6km、西藏王高原の丘陵凹地に造られた灌漑用の沼、三本木沼の東側丘陵斜面に立地する。かつては、沼の中からも土器片が採集されたそうである。現在は、沼の周辺を走る道路の東側の畠地に遺物を散布するのみであるが、遺跡の範囲としては、沼の凹地から東側丘陵斜面一帯までの広がりが推定される(第1・2)。

遺跡付近の標高は520m前後で、現在は野菜及びブドウ畠になっている(図版1)。

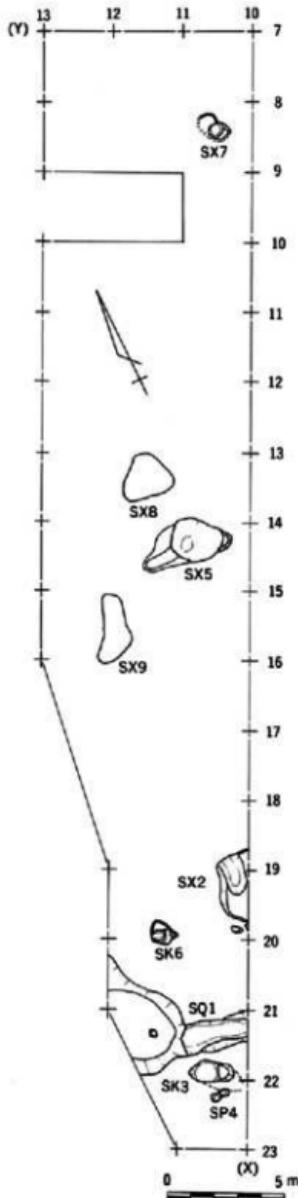
遺跡の基本層序は、Ia層—耕作土、Ib層—黒褐色土(粘土粒を斑状に含む)、II層—暗褐色土、III層—明褐色土(粘土混じり)、IV層—黄褐色粘土(ローム)である。斜面のため各層は一様ではなく、II・III層は下側にのみ堆積する。遺物はII層下部からIV層上面に包含する。また、遺構確認面はIV層上面である(第3図)。

遺構は、全体に19~22-10・11Gに集中し、精査した結果、焼土・木炭混じりの土色変化がみとめられ、21-10・11Gに窯跡の存在が確認され、さらにその付近に土壤・ピット等がそれぞれ検出された(第4図)。

遺物も同様に、南側に偏在し、特に窯跡覆土内及びその周辺に顕著である。



第3図 土層断面図



第4図 造構配図

### III 遺構

今回検出された遺構は、登り窯跡1基・土壙2基・ピット1基・落ち込み5基である。それらは、大半が19~22-10・11Gにまとまっており、斜面北西方向（第4図）までは、あまり広がらないようである。それら遺構は、全てIV層上面の精査中に確認された。

#### 1号窯跡（第5図 図版2・3）

2-10Gに位置する。最初、同Gの北側に木炭・焼土混りの帯状に広がる土色変化がみとめられ、さらに覆土に混じて多量の土器片が確認された。そこで半截して精査を進めた所、赤褐色に焼けた床面と側壁が現われ、穴窯であることが確認された。しかし、覆土はバサついて柔かく、攪乱を受けており二次堆積土であることが判明した。

最終的に検出し得たのは、窯跡の焚口から燃焼部まで、斜面上部にあると思われる焼成部及び窯尻等については、調査区域外（事業区域外）に入るため不明である。

側壁はほぼU字形に立上り、途中少しそばまるがほぼ平行にのびている。床面は舟底状を呈し、焼きしまっている。調査区壁際での勾配は、約27°を測る。焚口から下位は、木炭・焼土混じりの層が、斜面に沿って梢円形の広がりを示し、特に20-21-11G壁付近から多量の土器の出土があり、灰原の一部と思われる。覆土は、窯体も含め16層に分けられる。

出土遺物は、須恵器・赤焼土器が多く出土し、灰原出土の比率では後者の方が多い。主に壺が多く、須恵器蓋は1点も見られない。その他土錐が窯体覆土及び22-11Gから各1点づつ出土している。

窯体の主軸方向はN-73°-W、確認全長2.8m、幅1.2m、壁高65cmを測る。

#### 2号落ち込み（第5図 図版4）

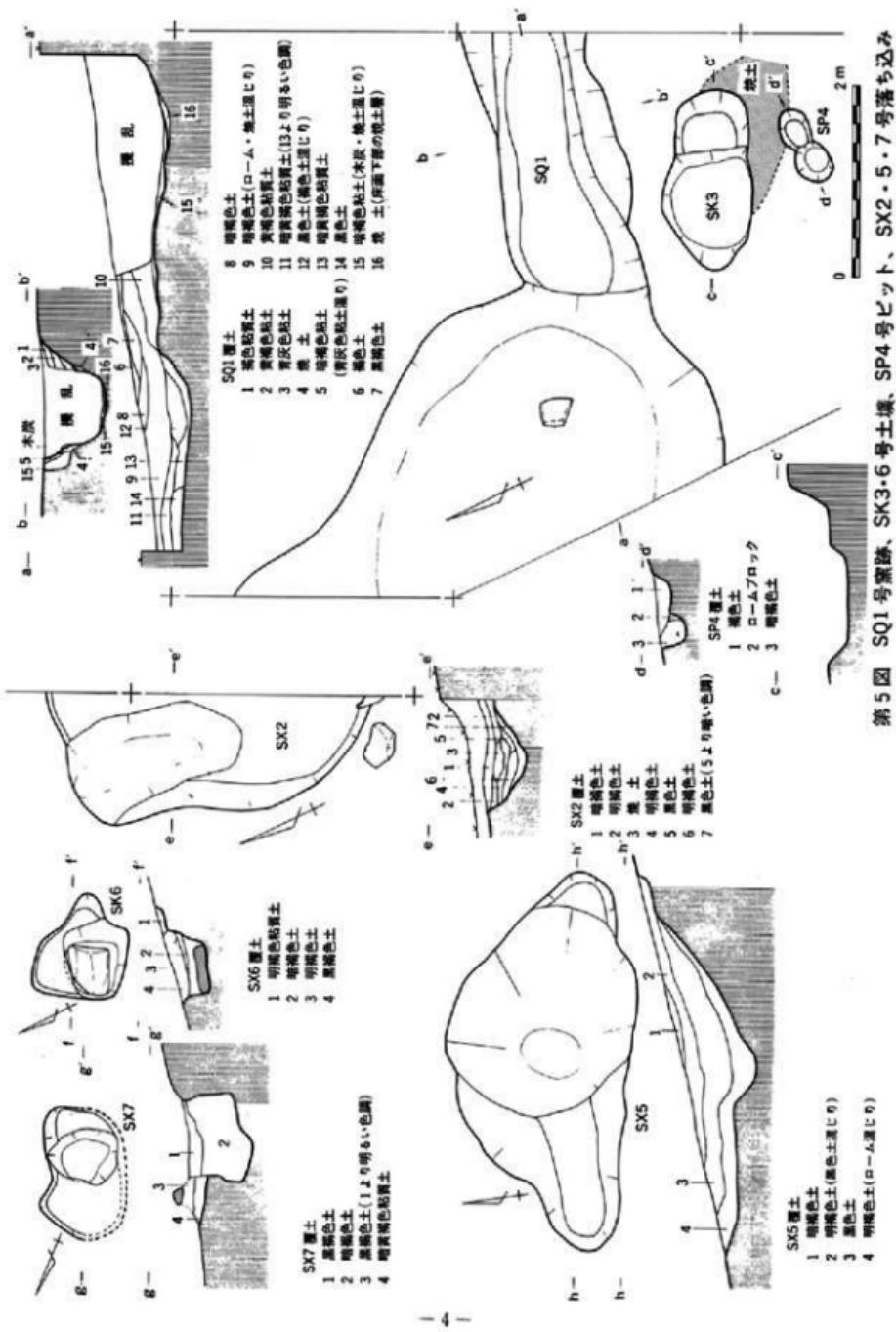
18-19Gに位置する。東側は調査区域外にあり、平面形は半截の不整梢円形を呈する。長径3.4m・深さ20cmを測る。北側に土壙状の落ち込みがあり、壁は斜位に掘り込まれている。床面はほぼ平坦で、ピットは未検出である。覆土は7つに分けられ、レンズ状に焼土を堆積する。出土遺物は、赤焼土器壺・土師器甕が1層から出土。

#### 3号土壙（第5図 図版2）

21-10Gにあり、SQ1南側に隣接する。平面形は、梢円形で床面が二段になっている。覆土は、攪乱による二次堆積である。壁は斜めに掘り込まれ、上部及び外側斜面上部が焼けている。深さは上が40cm・下が65cmで、全長1.85m、長軸方向はN-67°-Wである。

#### 4号ピット（第5図 図版2）

22-10Gに位置し、SK3南隣にある。2連のピットを呈し、全長80cmを測る。深さは、



第5図 SQ1号跡地、SK3・6号土壌、SP4号ピット、SX2・5・7号落ち込み

16 cm・30 cmである。3層に分かれる覆土の、1・3層から赤焼土器坏・土師器坏が出土。

#### 5号落ち込み（第5図 図版4）

14-10・11 Gに位置する。平面形は不整橢円形で、長径4 m・短径2 m・深さ95 cm、長軸方向N-85°-Wである。床面はやや起伏を示し、壁は皿状に落ち込んでいる。覆土は4層に分かれ、レンズ状の堆積を示す。同様のものに8号・9号落込み（平面確認のみ）がある。遺物は、1層から須恵器・土師器坏の小片が数点出土。

#### 6号土壤（第5図 図版4）

19-20-11 Gに位置する。不整形の平面を示し、二段に掘り込まれている。径1.1 m・深さ8 cm・40 cm、長軸方向N-66°-Wである。床面には、50 cm大の礫が堆積する。覆土は4層に分かれ、1・2層から須恵器・赤焼土器・土師器坏・甕が数点出土。

#### 7号落ち込み（第5図 図版5）

8-10 Gに位置する。不整形を呈し、長径1.4 m・短径80 cm・深さ70 cm、主軸方向N-25°-Wである。床面は凹凸が激しく、壁はやや袋状に掘り込まれている。覆土は4層に分かれるが、全体に柔らかく近年の堆積を思わせる。出土遺物はみとめられない。

## IV 遺 物

出土遺物は、総数4,377点を数え、大半が土器破片である。主として19-22-10-11 Gにまとまっており、7-12-10-12ではほとんど出土がみとめられない。器形及び製作技法により、土師器・須恵器・赤焼土器・土製品に分けられる。底部破片を基準にしたそれらの割合は、13%・34%・53%である。なお土製品では、土鍤2点のみである。

#### 土師器（第6図 図版7・8）

Ia類 糸切り離しの高台付坏である。底部からゆるやかに内湾し、口縁下約1 cmで外反する形態である。内面は風化して粗くなっているが、一部ヘラミガキを施した痕跡がうかがえる。また高台の両側縁及び外面には、ロクロ整形によるナデ調整がみとめられる。口径14.6・底径6.9・器高5.2 cmを測る（1）。

Ib類 糸切り離しの高台付坏で、内面にヘラミガキの後黒色化処理を施す。器形は、前類に類似するが、高台は両側縁にナデ調整を行ない、外側に張り出すように稜を形成している。本類は、土師器坏総数の71%を占める。なお内面のヘラミガキは、口縁部から体部下半にかけては平行に行なわれ、底部は中心部から外側に放射状に入れられている（2）。

Ic類 両面黒色化処理を施した壺である。全て小片で全体については不明であるが、立上りが直線的で、口縁部が少し外反する器形である。底部については、不明である。内外面には、ロクロによるナデ調整が行なわれ、ミガキを施すものは少ない。

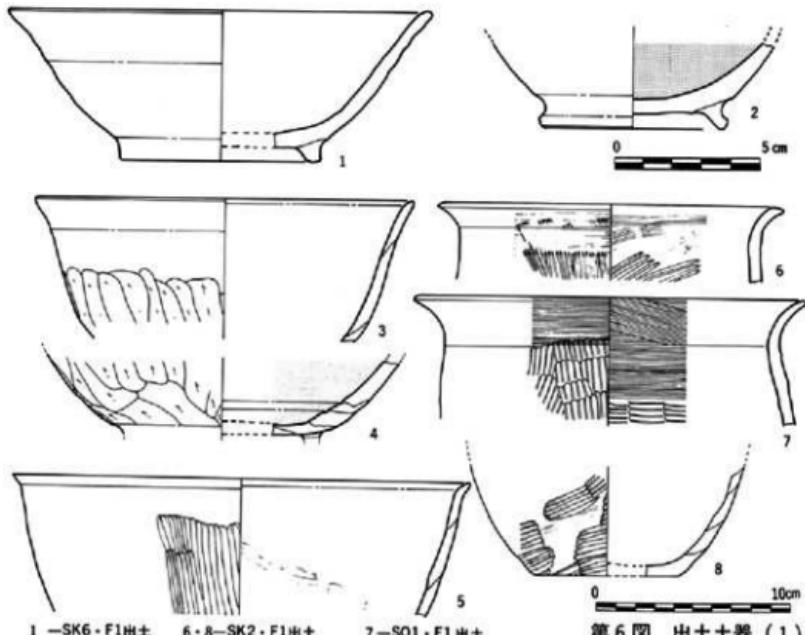
II類 内面に黒色化処理を施した高台付鉢である。やや丸味のある体部から、口縁部が少し外反する器形で、やや厚手の作りである。外面はロクロ横ナデを施し、底部方向から体部に向けてヘラ削りを加えている。また内面は、ヘラミガキの後黒色化処理を行なう。口径 19.6・底径 10 cm 前後である (3・4)。

III類 丸味をもつ体部から口縁部が短く外反する特徴を示す。器形は、鉢あるいは甌と推定される。内外面に刷毛目、ロクロナデ調整を行なう。口径 23.6 cm を測る (5)。

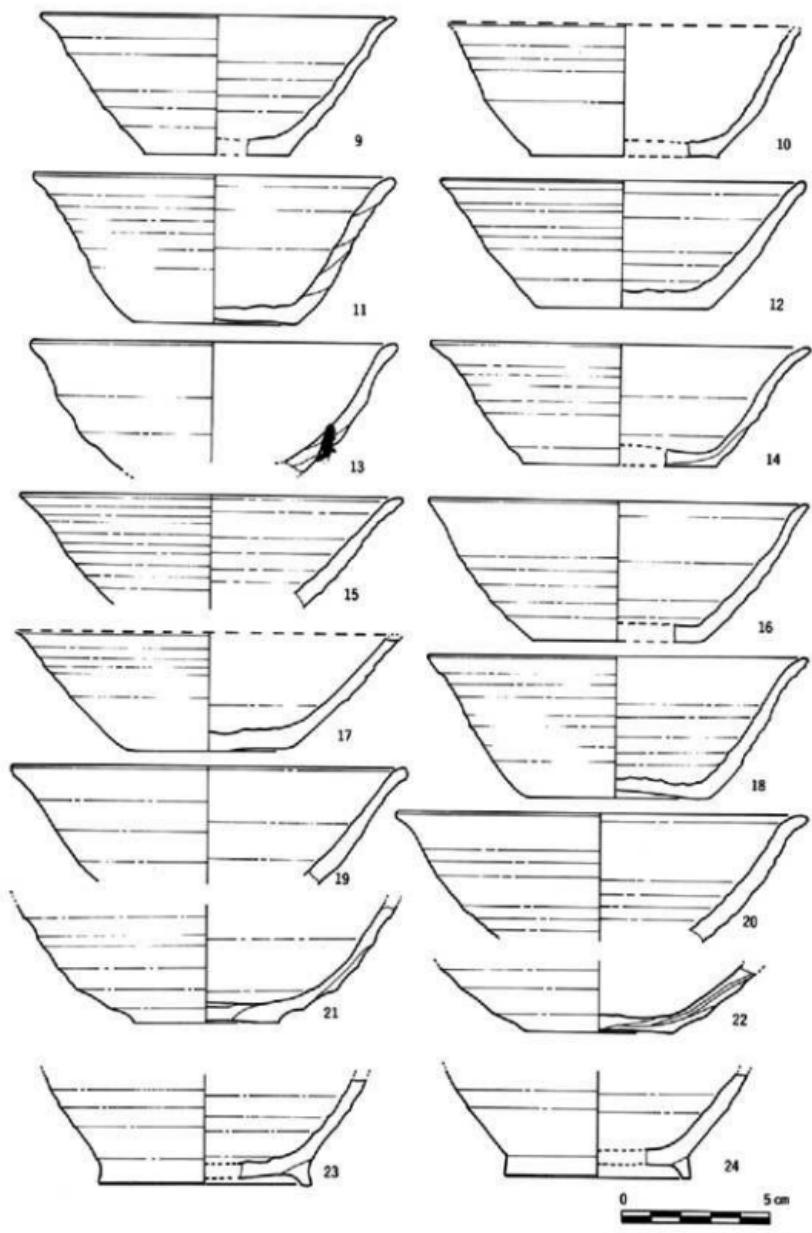
IV類 口縁部がくの字形に外反する長胴の甌である。内外面とも刷毛目を加え、口縁部はロクロナデ調整が明瞭である。口径 17.0~20.0・底径 7.4 cm を測る。

#### 須恵器 (第7図 図版9)

Ia類 直線的に立上り、体部上半からゆるく外反する壺である。底部切り離しは、糸切り・無調整である。大きさは、口径 11.0~14.0・底径 5.0~6.5・器高 5.0 cm 前後にまとめられる (9~12・16・18~20)。



第6図 出土土器 (1)



第7図 出土土器(2)  
9・10・16・17—SQ1・F出土

I b類 鋭角的に立上る体部から、口縁部がゆるく外反する壺である。切り離しは糸切りで、無調整である。前類に比して、器高が4.0cm前後と低目である(14・15・17)。

I c類 底部破片のみで全体については不明であるが、体部が丸味を呈して立上る壺である。底部は、糸切り離し、無調整である。底径は、5.0cm前後を測る(21・22)。

I d類 高台付壺である。これも底部破片のみであるが、直線的な立上りを示す。出土量は、壺全体の約10%と少ない。底径は、7.0・5.0cm前後と2つに分けられる(23・24)。

II a類 口縁部が直立し、肩の張る短頸壺である。内外面ともロクロ目が顯著で、口唇部外側に棱を形成する。一括出土ではなく、破片のみである。口径は、20.0cmを測る(25)。

II b類 口縁部がくの字形に外反する短頸壺である。体部は、丸味を呈しており、最大径は前類より下に位置する。これも破片のみで口径は21.2cmを測る(26)。

III類 外反する頸部から、口縁が直立する長胴の壺である。そのため口縁部内側の傾斜変換部に段が、形成される。体部は、ほぼ直線的に立上り、幅約1.5cmのヘラ削りが下位方向に行なわれ、その後口縁部に対してロクロナデが施されている。実測復元した計測値は、口径27.4cmを測る(27)。なお、体部破片の中に内外に刷毛目をもつ一群もある(図版8)。

#### 赤焼土器(第8図 図版9)

I a類 体部が直線的に立上り、口縁部が少し外反する壺である。内外面ともロクロ整形による凹凸が顯著である。底部切り離しは、糸切り・無調整である。出土位置では、SQ1周辺に集中し、X軸15列以下ではほとんど見られないようである。口径11.5~12.6・底径5.6~6.0・器高4.7cm前後の数値にまとめられる(28~32)。

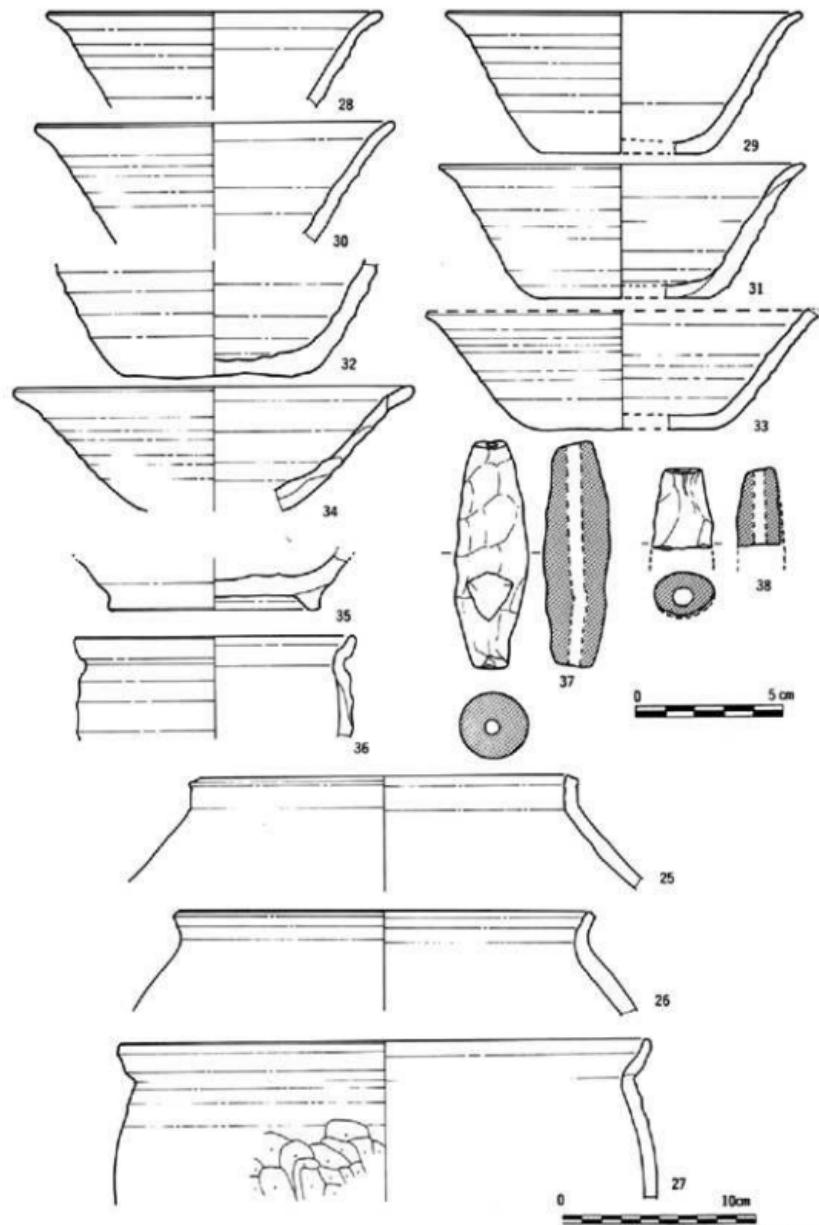
I b類 体部が鋭角的に立上る壺である。そのため前類よりも口径が少し大き目で、また器高も4cm大と低い。立上り形態は、直線的なもの(33)とやや丸味を呈するもの(34)とに分けられ、前者の方が口径に比して底径が大きい傾向を示している。底部切り離しは、糸切り・無調整である。

II類 高台付壺である。ほとんどが小片で、実測可能なものは底部破片のみである。高台は、両側縁にロクロによるナデ調整が施され、底面外周に直立に付けられる。底径7.2cmを測る(35)。量的には、本類が14%、前2類が86%の割合である。

III類 口縁部内側に段をもつ壺である。頸部からくの字形に外反し、さらに直立する口縁部が特徴的である。器面はロクロ整形による凹凸が明瞭で、口縁部から頸部にかけてはナデ調整がみとめられる。口径9.6cmを測る(36)。

#### 土製品(第8図 図版9)

土錘 円筒形の両端が、やや先細りを呈する手捏ねの土錘である。両端から行なわれた径約5mmの貫通孔をもつ。焼成は良好で、赤褐色を呈する。2点出土(37・38)。



第8図 出土土器(3)  
28~35・37~38-SQ1・F1出土

## V まとめ

今回の調査は、県立西蔵王公園整備事業・園路工事に伴う緊急発掘調査である。そのため調査は、三本木沼東側丘陵斜面の事業区域内に限定し、昭和 56 年 6 月 3 日から 6 月 26 日までの延 18 日間にわたり実施した。発掘面積は、320 m<sup>2</sup>である。

調査の結果、遺構では登り窯跡 1 基・土壙 2 基・ピット 1 基・落ち込み 5 基が検出された。

1 号窯跡は、部分的確認で覆土が攪乱されており、窯体の構造については明確に結論できないが、床面・側壁の状態から推定して半地下式無段登り窯であろうと考えられる。出土遺物は、窯体覆土が攪乱のため窯体下部の灰原出土の場合では、須恵器・赤焼土器の割合がおよそ 40%・60% の比率を示している。器形別では壺が 87% を占め、須恵器蓋や巻き上げタタキ手法による大形の甕は、1 点もみとめられない。また、壺も口径が 12~13 cm、底径が 4~5 cm、器高が 5~6 cm の範囲にまとまり、比較的小形である。全てロクロ整形で、底部切り離しは糸切り・無調整である。それらの特徴から、時期的には平安時代後半、11 世紀代のものと考えられる。

ところで赤焼土器については、ロクロ整形等技術的には須恵器の範疇に入ると考えられるが、酸化炎焼成であること着目して分類化した。しかし、それ以外には壺 Ia・Ib 類段をもつ甕 III 類等、形態上の共通点が多く、さらに灰原から多量に出土することも考慮に入れると、それが意図的な焼成というよりも須恵器の生焼け、ないしは焼き損じである可能性が強いようである。いずれにしても窯体での確認ではないので、結論は避けたい。

土師器は、出土遺物全体の約 19% と少ない、4 類に分けられていればもロクロ調整を行ない、時期的には表杉の入式併行と思われる。この内 I b・IV 類が灰原から出土しているが、量的には約 3% と少ない。

2 号落ち込みは、検出状況から当初住居跡と判断されたが、ピット等明確な資料がなく性格不明遺構である。

3 号土壙は、壁面が焼けておりまた S Q 1 と S P 4 が隣接することから、上屋をもった何らかの焼成遺構と推測される。覆土が二次堆積土で遺物との明確な関係がわからず速断できないが、上部を開放している点を特徴とすれば、当然酸化炎焼成が行なわれたわけで、前述の赤焼土器との関係が注目される。今後の明確な類例を待ちたい。

5・8・9 号落ち込みは、黒色土が下に入り込む覆土の特徴から風倒木によるものと考えられる。

6号土壙は、S Q 1北側に位置し、焼き損じ等、失敗品の土器捨て場とも推定されるが、廣底に礫を載せている以外は、出土品も少なく性格不明遺構である。

7号落ち込みは、覆土の状態が新しく後世のものと思われる。

以上であるが、今回の調査は、窯体覆土が攪乱した二次堆積土であり、また窯体も部分的確認ということもあって、明確な窯体構造及びそこで生産された土器との直接的関係は見出せなかった。それに出土土器も、大半が小破片であり、実測復元で分類せざるを得ず、詳細な部分については不明な点も多い。しかし、形態においては、やや小形で直線的な立上りから口縁部が少し外反する須恵器环等、昭和40年の調査で出土した土器の特徴とほぼ同じ傾向を示しており、三本木窯跡で生産された土器の特徴といえよう。

なお、昭和31年に赤堀長一郎氏によってこの近く（場所は不定）で調査が行なわれ、住居跡が1棟検出されている。その内部から須恵器稜碗が、土師器と一所に出土しているが今回の調査ではみられなかった。この稜碗は、川西町壇山第1号窯跡に出土例があり、時期的には9世紀末～10世紀前半に位置づけられている（柏倉・伊藤1970）。この近くに、別の古い時期の窯跡が存在するのかもしれない。

一体、三本木窯跡で生産された土器はどのような分布範囲を示すか、また赤焼土器出土の背景等、今後の窯跡及び集落跡調査の中で明らかにしていく課題といえよう。

#### 引用・参考文献

- 秋葉隆司 1967「山形市三本木沼発見の古代窯業遺跡について」『歴研月報』第14集第74号所収  
山形大学教育学部歴史学研究会
- 柏倉亮吉他 1969「山形県史資料11篇 考古資料」 山形県
- 柏倉亮吉・伊藤 忍 1970「平野山古窯跡群」—山形県における古代窯業遺跡の研究一 寒河江市教育委員会
- 小笠原好彦 1976「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』所収 東北考古学会編
- 佐藤正俊他 1981「三本木窯跡」「分布調査（8）」山形県埋蔵文化財調査報告書第45集所収 山形県教育委員会



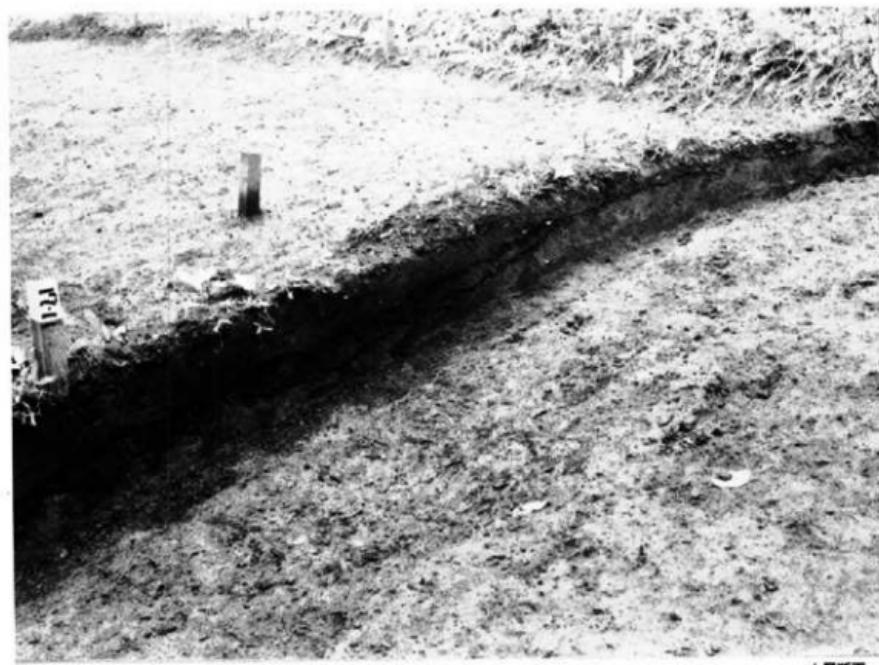
遺跡遠景(北側から)



遺跡近景(東側から)



調査風景



土層断面



SQ1 号窯跡・SK3 号土壙・SP4 号ピット全景



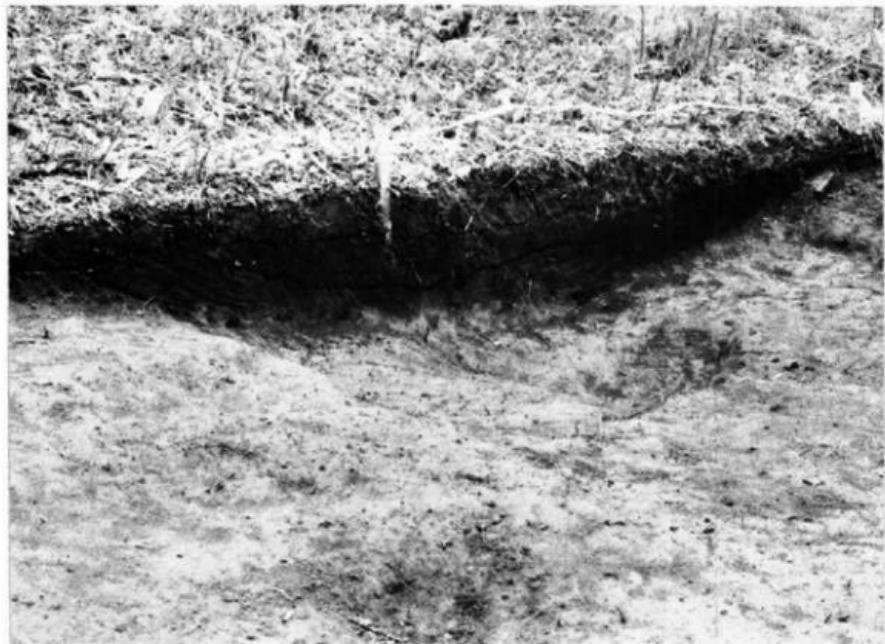
SK3 号土壙・SP4 号ピット



SQ1号窑址



同·土层断面



SX2号落ち込み



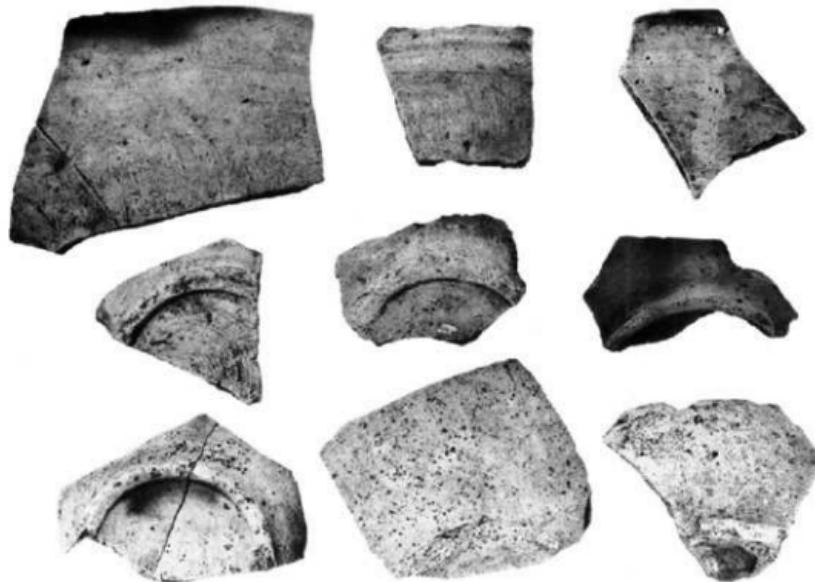
SX5号落ち込み



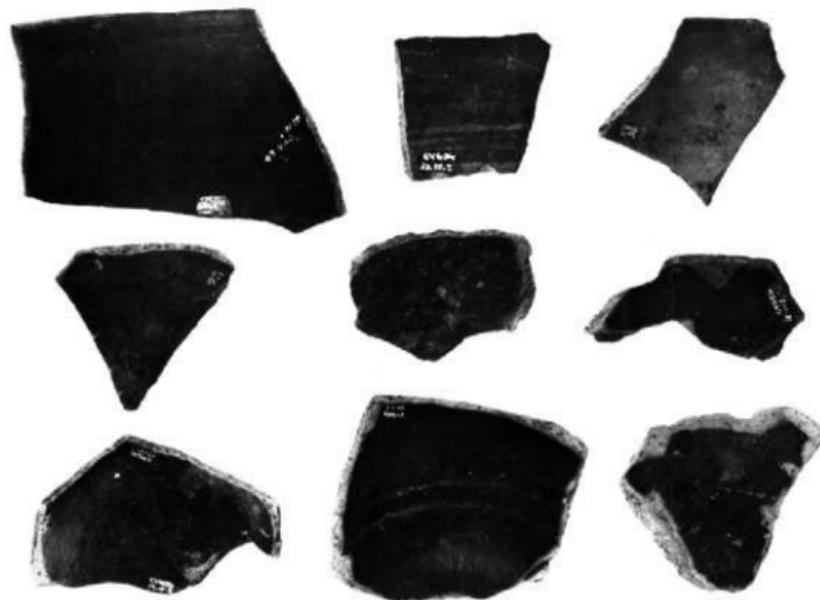
SK6号土器



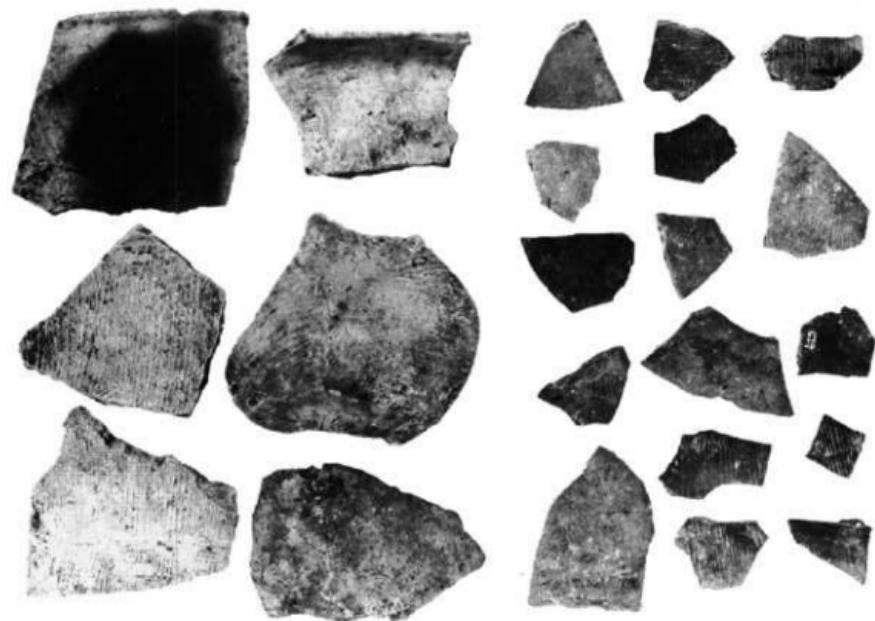
SX7号落ち込み



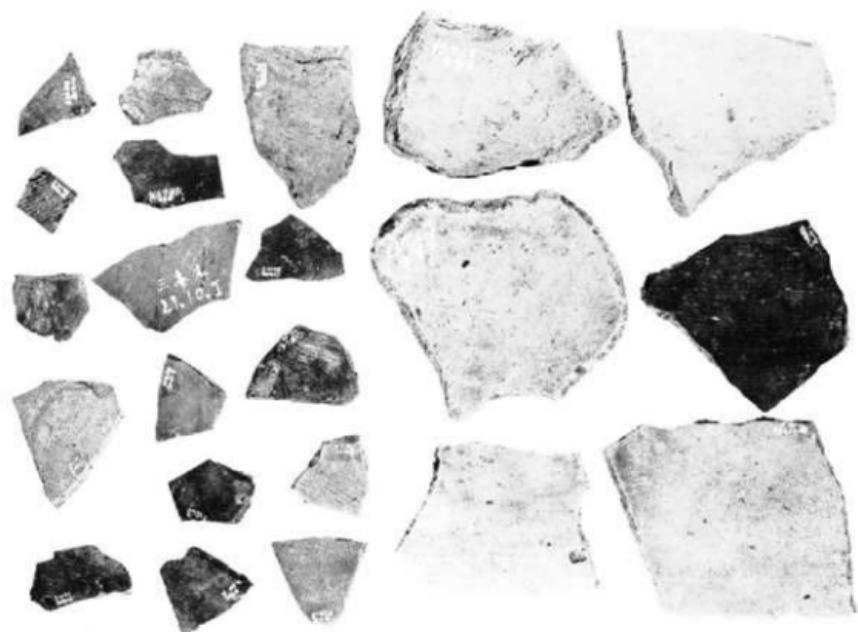
出土土器(1)・土師器



出土土器(2)・同内面



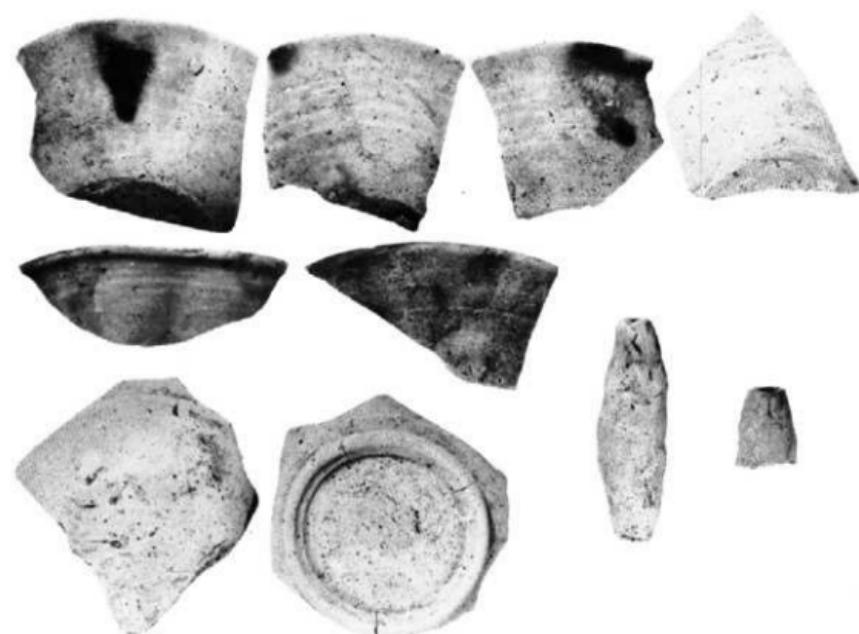
出土土器(3)・土師器・須恵器



出土土器(4)・同内面



出土土器(5)・須恵器



出土土器(6)・赤焼土器・土器

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第59集

さん ほん ぎ  
**三本木窯跡**

**発掘調査報告書**

昭和57年2月25日 印刷

昭和57年3月1日 発行

発行 山形県  
山形県教育委員会

印刷 梅大風印刷

---